

Cloves & Carnation/Bir Tutam Karanfil

圧倒的な映像が静かに問いかける、現代トルコ映画の到達点

リアリズムと虚構が交差する、現代社会の新しい寓話

ファンタジー

アッバス・キアロスタミ、アスガル・ファルハーディーなどイランの監督たちは言うに及ばず、近年の中東映画から目が離せないのは周知の事実だ。

トルコではユルマズ・ギュネイの後、ヌリ・ビルゲ・ジェイランが現れ、その次世代の才能と言われているのが、このベキル・ビュルビュル監督。彼は小津安二郎を敬愛し、この作品のワールドプレミアに東京国際映画祭を選んだ。その後、世界中の映画祭を回り、グランプリ、審査員特別賞など数々の賞賛に輝いている。

STORY

荒涼とした冬景色のトルコ南東部。

年老いたムサは、亡き妻の遺体を故郷の地に埋葬するという約束を守るため、棺とともに旅をしている。

紛争の続く場所へ帰りたくない孫娘のハリメだったが、親を亡くし、仕方なく一緒に歩いている。

亡き妻とともに故郷への帰還を渴望するムサ。

旅で出会う様々な人たちから、まるで神の啓示のような「生きる言葉」を授かりながら進んでゆく。

国境、生と死、過去と未来、自己と他者、棺をかつぐ祖父と孫娘の心の融和。

トルコから届いた3人のおとぎ話は、境界線の先に小さな光を灯す。

虚飾なき描写の積み重ねの果てに、突如夢幻的、魔術的とも見える光景が出現する斬新で寓話的な構成。

説明描写を極力避け、挙動や表情、小道具、そして風景の力で多くを語らせる映画の演出。

主人公たちの寡黙さとは対照的に、周縁的存在に大多数の台詞を付与する非一般的な脚本美学……。

先鋭的で強烈な作家性を世界に印象付ける一作が登場した。

映画評論家 暉峻創三

人間は理不尽に訪れる死を前になすすべもない。

だからこそ、何千年も前からずっとあがき爪痕を残すように、芸術は死を描き続けてきた。

戦争という理不尽に翻弄される少女にとって、死を背負う祖父の切実な歩みもまた理不尽である。

しかし、その理不尽の中でもとにかく足を前に進ませなくてはならないその姿は、生きることそのもののようでもある。

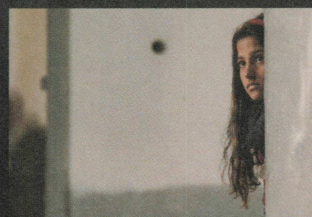
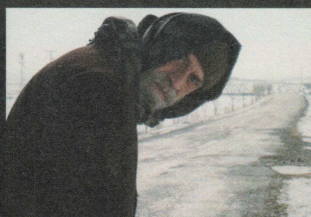
だからこそ、歩みの先にある「越境」の瞬間と、それを目撃する少女の姿に胸を打たれる。

なぜなら、それはいずれ私たちに必ず訪れる未来の予兆でもあるからだ。

映画監督 深田晃司

現代の社会情勢をモチーフにしながら、崇高で純粋な寓話として昇華させた物語

James Hadfield / Japan Times



監督：ベキル・ビュルビュル 脚本：ビュシュラ・ビュルビュル キャスト：シャム・シェリット・ゼイダ、デミル・バルスジャン
海外セールス：Alpha Violet 配給：ラビットハウス 協賛：トルコ文化観光省・トルコ国営放送局
2022 / 製作 トルコ・ベルギー / トルコ語・アラビア語 / 16:9 / 5.1ch / カラー / 103分

葬送のカーネーション
Cloves & Carnation / Bir Tutam Karanfil

トルコ建国100年／日本トルコ国交100周年、そしてトルコ・シリア地震(2023.Feb.6)から1年となる
2024.1.12 fri. ヒューマン・トラストシネマ有楽町、新宿武蔵野館、YEBISU GARDEN CINEMA 他

